序言

埋蔵文化財調査センター長
石渡　明

2004年度の７号に引き続き、当センターの2005年度活動報告、本学名誉教授 板垣英治先生の論文、金沢美術工芸大学　山崎　剛先生の論文を掲載した「金沢大学文化財学研究」８号を刊行します。

当センターは1997年に学内共同利用施設として発足し、以来、全学のご協力、ご支援、ご理解をいただきながら金沢大学角間キャンパス（Ⅱ期移転用地)、宝町キャンパスの医学部及び附属病院、鶴間キャンパス、東兼六養護学校などにおいて調査研究を実施してきました。各キャンパスでの発掘によって、古代から近世・近現代にわたる遺構が確認され、膨大な量の遺物（文化財）を得ることができました。宝町キャンパスの立体駐車場建設地点の発掘は2005年12月で終了しましたが、遺物の整理作業は現在も続いています。発掘された江戸期の寺院群の遺構は古地図と一致し、九谷焼をはじめとする陶磁器や漆製品・木製品などの出土品は当時の経済や生活の様子を如実に示していて、これらの発掘成果については地元の新聞紙上でも大きく報道されました。2006年度は宝町キャンパスの他の２地点と平和町キャンパスの附属学校内での調査が予定されています。

当センターの業務は野外での発掘調査だけではなく、出土した文化財の接合・復元、整理・分類、実測図作成、写真撮影、報告書の原稿執筆と編集、遺構・遺物の保存・活用計画の立案なども重要な業務です。しかし、近年の大学法人化を含む社会情勢の急激な変化によって、遺構の現地保存が困難になり、記録保存のみにとどめざるを得ない状況になっていることは残念です。遺跡を現地保存し、公開することは、歴史を重視し、実物の証拠に基づいた着実な学問を奨励する、金沢大学の見識を示す広告塔となるはずです。

また当センターの作業場の広さ、環境、人員配置は十分ではなく、調査研究に当たる助教授１名、助手１名と２名の技能補佐員は、遺物を収納する箱が天井まで積み上げられた狭いプレハブの建物内で多忙を極めており、この状況は改善する必要があると考えております。

今後の本紀要には、大学内遺跡についての報告や関連する研究成果を順次掲載していく計画です。本紀要が金沢大学における文化財への理解を深めるとともに、地域の歴史研究のための資料を発信することで、地域貢献の一助となることを期待します。